

---

# とるタクシー

佐久謙一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
とるタクシー

【Nコード】  
N6396P

【作者名】  
佐久謙一

【あらすじ】  
とある深夜の奇妙な出来事。  
ホラー短編。

私は仕事を終えて、会社を出た。

暗く、静まり返った夜道を歩いてみると、車のエンジン音が聞こえてきた。振り返ると、一台のタクシーが暗闇の中から浮かび上がってきた。私は手をあげて、そのタクシーを拾った。

私はタクシーの運転手に行き先を告げると、座り心地の悪いシートに、もたれかかった。

「こんな遅くまで残業ですか？」

運転手が話しかけてきた。定年間近だろうか。白髪の目立つ、六十ぐらいの運転手だった。

はい、そうなんです。といっても新人だから雑用ばかりですけどね。

私は運転手にそう告げた。

「そうですか。若い人は大変だ」

タクシーが目的地に着いた。

私は料金を払い、タクシーを降りた。

私は仕事を終えて、会社を出た。

暗く、静まり返った夜道を歩いていると、車のエンジン音が聞こえてきた。振り返ると、一台のタクシーが、暗闇の中から浮かび上がってきた。私は手をあげて、そのタクシーを拾った。

私はタクシーの運転手に行き先を告げると、座り心地の悪いシートに、もたれかかった。

「こんな遅くまで残業ですか？」

運転手が話しかけてきた。口元のしわが目立つ、四十ぐらいの運転手だった。

「若いうちは雑用ばかりで大変でしょう？」

はい、そうなんです。といっても仕事だから仕方がないですよ。

私は運転手にそう告げた。

「そうですか。働くことは大変だ」

タクシーが目的地に着いた。

私は料金を払い、タクシーを降りた。

私は仕事を終えて、会社を出た。

暗く、静まり返った夜道を歩いていると、車のエンジン音が聞こえてきた。振り返ると、一台のタクシーが、暗闇の中から浮かび上がってきた。私は手をあげて、そのタクシーを拾った。

私はタクシーの運転手に行き先を告げると、座り心地の悪いシートに、もたれかかった。

「こんな遅くまで残業ですか？」

運転手が話しかけてきた。髪を後ろへ撫でつけた、三十ぐらいの運転手だった。

「若いうちは雑用ばかりで大変でしょう？」

私は頷いた。

「仕事だから仕方がないですけど、大変じゃありませんか？」

はい、そうなんです。といっても大切な仕事を任されてるんです。これでうまく結果を出さないと。

私は運転手にそう告げた。

「そうですね。出世するのは大変だ」

タクシーが目的地に着いた。

私は料金を払い、タクシーを降りた。

私は仕事を終えて、会社を出た。

暗く、静まり返った夜道を歩いてみると、車のエンジン音が聞こえてきた。振り返ると、一台のタクシーが、暗闇の中から浮かび上がってきた。私は手をあげて、そのタクシーを拾った。

私はタクシーの運転手に行き先を告げると、座り心地の悪いシートに、もたれかかった。

「こんな遅くまで残業ですか？」

運転手が話しかけてきた。新人だろうか。まだ顔に幼さの残る、二十ぐらいの運転手だった。

「若いうちは雑用ばかりで大変でしょう？」

私は頷いた。

「仕事だから仕方がないですけど、大変じゃありませんか？」

私は頷いた。

「でも、大きな仕事を任されてるんですからね。頑張っただけで出世してくださいね」

え……？

私は運転手を見る。

その話、誰から聞いたんですか？

私の問いに、運転手はバックミラー越しにこちらを見た。

「何を言ってるんですか？」

運転手の目元が笑う。

「全部あなたが話してくれたじゃないですか」

その言葉を聞いた途端、私の背筋に寒気が走った。

降ろせ！ 降ろしてくれ！

いつの間にか、私はそう叫んでいた。

タクシーは音を立てずに止まった。

私は料金も払わず、ドアを蹴破るようには開け、タクシーから飛び降りた。

私が地面に手をつくと同時に、ドアが閉まり、タクシーは走り去ってしまった。

私は安堵の息を吐きながら、夜道を歩く。電灯の消えた店の前を通りかかったとき、暗くなったショーウィンドウが鏡のように、私を映していた。私はふと、その映る姿に目をやった。

そこには年老いた一人の老人の姿が映っていた。

私はもう、タクシーの運転手のことは思い出せなくなっていた。

END

#### 4 (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。  
ふと思いついたことを文章にただけですが、少しでもそっくりと  
していただければと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6396p/>

---

とるタクシー

2010年12月30日19時19分発行